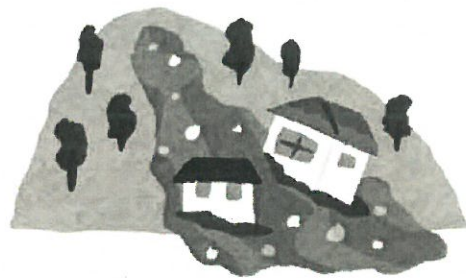


すくも
自主防災会だより
第8号

山沿いのリスクについて



かつて、「山には地震がないもの」と思っていた人は多かったです。たしかにこれまで起きた大地震は、そのほとんどが海溝などの海底を震源地にしたものが中心で、山沿いにある活断層の動きによる震災（直下型地震）にはあまり注目が集まっていませんでした。また、山沿い活断層の調査が全国的に進んでいなかっただのも一つの理由です。しかし、2004年に起きた新潟中越地震がその常識を覆したのです。

マグニチュード6.8を観測した新潟県中越地方では、川口町で震度7、小千谷市、山古志村、小国町で震度6強を観測する強い揺れが発生、山沿いの集落では大規模な土砂崩れが発生したため、このエリアのライフラインが完全にダウン、被災地域への道路が寸断されたことにより、被災者への救援が大幅に遅れるなど、平野部では起こりえない様々な被害が発生しました。それまで、国内の山間部でこれほど大きな地震が発生した例はなく、軟弱な地盤に覆われた震源域では強い揺れにより地盤崩壊や地すべりが頻発しました。



たとえ急峻な山々に挟まれた山間部ではなくとも、近隣に山やがけなどが隣接するような地域では、常に土砂崩れ

や落石等の危険を意識していただく必要はありません。たとえ大雨で地盤が緩んでいるところに南海地震が発生した場合、宿毛市でも、予想を超える大規模な土砂崩れや地盤の崩壊があることは十分に認識しておくべきでしょう。さらには、南海地震という海溝型地震が引き金となって、内陸部にある複数の伏在断層と呼ばれる断層が連鎖的に揺れ動く公算も決して少なくないと考えられるべきで、これに対する物心両面での備えをしておくことは一般常識論的には正しい姿だと考えます。

遠い海洋が震源域の南海地震の激震そのものの影響で、山津波と言えるほどの大規模土石流が市内に生起する可能性は少ないにしても、これに誘発される地域限定的な断層（直下型）地震が発生した場合、山沿いエリアにおける相当の脅威になるでしょう。この地域に「活断層はない」というのと「活断層は未だ調査されていない」のでは話が全く異なります。要は決めつけてはいけません。決めつけるから想定外が起きるので

山沿いのリスクについて考える場合、1年半前（平成24年秋）に、南海トラフ巨大地震を前提にした大津波被害想定を知らされて、その驚がく的データに息をのんだ時と同様に、「大変だ！大変だ！」と叫んで、挙句の果ては「どうにもならんネー！」の無力感世界に陥ることは避けねばなりません。「山津波」という大規模土石流が、宿毛市内の山沿いエリアを飲み込んでいくがごとき劇画的な話にはくみせず、しかし、最悪の事態も頭の片隅にとど

されていない活断層は国内に無数に存在しており、その活動については、ほとんど解明されていないのが今の実情であることもよくよく承知しておきたいものです。



めて、ハード・ソフト両面で従来から実行してきている通常の土石流対策を、より早く充実したものに高めていくそんな現実的行動が求められていると感じます。

「山津波が来るぞー」も「34メートル超の大津波が来るぞー」と同じ穴の轆し話し程度に理解して、何より大切なのは、「だからわれわれ（自主防災というレベル）は、今何をすべき！如何にするの？」と落ち着いて自分に問うてみることに見つけました。

宿毛市自主防災会連絡協議会
役員代表 河野典生

